

認知症高齢者の行動・心理症状(BPSD)改善のための支援方法

滋賀県立大学人間看護学部・望月紀子
滋賀県立成人病センター看護部・小牧清香

【背景】

介護保険制度を利用する認知症高齢者は、2010年に280万人であり、2025年には470万人と予測されている。介護保険制度が整備されたことにより、認知症高齢者は、在宅や施設での生活が過ごしやすくなってきた。一方、介護者にとって、BPSDは多大なケアを要し、精神的・身体的負担となることが数多く報告されている。BPSDは脳の器質的变化に起因し、生活歴やパーソナリティ、環境や人間関係などの心理・社会的な要因が関与しており、症状は多岐に渡り、個人差がある。高齢者施設職員のBPSDに対する支援の報告には、改善もしくは対応可能な事例や、反対にBPSDが促進される結果となった報告がある。そこで、BPSDの改善に繋がった対応を分析し、より効果的なBPSDに対する支援方法の示唆を得ることとした。

【方法】

介護老人保健施設に勤務する職員3名を対象として、個別に半構成的インタビューを行い、その内容を録音した。インタビューは、1名につき30分～1時間程を要した。対象である職員の基本属性と、観られたBPSDおよび改善に結びついた対応を聴取した。そのデータを逐語録に起こし、内容を分析した。倫理的配慮として、滋賀県立大学研究に関する倫理委員会の承認を得た後、施設の管理責任者の承諾を得て、対象者に協力を依頼した。

【結果】

対象者は、全員男性の介護福祉士で、24・35・37歳、経年数4・14・17年の者であった。観られたBPSDと改善に結びついた対応を、以下に示す。①整理整頓が困難：「何故ぐちゃぐちゃにするの？」と尋ねるのではなく、「何をしているの？」と尋ね、入所者は片付けているのだと、職員は認識を改めた。タンスに「上着」「ズボン」のシールを貼ることを、入所者に提案し、整理ができた。②収集癖：十数個のトイレトペーパーを居室に持ち運ぶ理由を聴き、その理由に応じる姿勢を示した。テレビのリモコンなど、以前の生活で使用していたものを手元に置くようにした。その後、部屋に物が溢れる状況がなくなった。③不潔行為：入所者の排泄時間を把握し、トイレ誘導し、失禁も無くなった。④入浴拒否：馴染みの同性職員が介助し、馴染みの道具を使用した。入所者からの入浴希望もみられるようになった。⑤帰宅願望：入所者に施設での役割を提供した。⑥徘徊：コーヒーやお茶を提供したり、声をかけながら入所者と一緒に歩いた(一時的に改

善)。⑦暴言：入所者の睡眠リズムを整えた。しばらくそっとし、思いの表出を図った。⑧物盗られ：衣類を洗濯に出している期間は、家族から別に預かっている衣類で補充し、タンス内の衣類が減らないようにした。⑨時間の混乱：時計やカレンダー、日課表を示し、入所者の納得をえた。

【考察】

職員が認知症のある入所者の行動に対する認識を改めたことで、言葉かけが変化し、それによって入所者は職員を受け入れる気持ちができ、収納位置を示すシールを貼るといったケアも受け入れられたと考える。収集癖については、入所者の思いに応じることで、納得が得られたと思われる。テレビのリモコンなど、その入所者にとって、必要な物・こだわりのある物が側にある環境を創ることで、安心感が得られたと考えられ、先行研究を支持する結果となった。トイレ誘導で不潔行為がなくなったことから、以前には、その入所者が失禁の始末をしようとしていたことが推察される。湯桶など馴染みの道具の使用、心許せる馴染みの職員が介助することで、入浴拒否の緩和に繋がったと考える。帰宅願望に関するBPSDは、居心地の悪さや、その場所に慣れないために起こるとも言われている。入所者の生活背景や性格を情報収集し、その人に適した役割を提供することで、その人がこの場所にいる意義を感じたであろう。また、馴染みの関係を築くことが、心地良い環境を創ると思われる。徘徊に対して、お茶を出すなど、入所者の気を紛らわせる対応は、徘徊が毎回落ち着くとは限らない。睡眠を整えるなどの生活リズム調整は、その人らしい生活形成に繋がり、ストレスを助長しないことになり、攻撃的行動にも効果的であると考えられる。一方、しばらくそっとしておくことで、思いの表出を図っても、必ずしもその人の抱えている問題が解決するとは限らず、その場のその人に合った対応であるかの見極めが望まれる。また、入浴や排泄ケア時に攻撃的行動が多く発生していると報告されていることから、入浴や排泄が、その人主体であることが、最も望まれる行為であると考えられる。リアリティオリエンテーションは、時間の混乱に効果的であると考えられた。

【結論】

BPSDに対する効果的な支援として、以下の方法が挙げられた。

1. 認知症者の行動に対する認識が変わることで、BPSDへの対応も変化し、改善に繋がる。
2. 認知症者にとって、馴染みのある環境を創ることが大切である。
3. 人間関係の構築が重要である。
4. ケア実施において、認知症者が主体であることを、心がける必要がある。